

田中教育研究所における知能検査の継承：  
大川一郎・中村淳子へのインタビューから<sup>1</sup>

鈴木朋子<sup>1</sup>

Succession of Tanaka-Binet Intelligence Scale  
in Tanaka Institute for Educational Research

Tomoko Suzuki<sup>1</sup>

<sup>1</sup>横浜国立大学教育学部

<sup>1</sup>Yokohama National University, College of Education

## はじめに

知能検査は、心理学における重大な「発明」と称されている（佐藤・溝口，1997）。1905年，フランスのビネ<sup>2</sup>(Binet,A.:1857-1911)とシモン(Simon,T.:1873-1961)によって発表された「異常児の知的水準を診断するための新しい方法(Méthodes nouvelles pour le diagnostic du niveau intellectuel des anormaux)」は，様々な課題が難易度順に配置されたもので，現在の知能検査の礎となった。ビネ・シモン式知能検査は，ビネ自身によって1908年，1911年に改訂され，MA (Mental age:精神年齢)が導入された後，多くの改訂版が発表された。最も著名な改訂版はアメリカのターマン(Terman,L.M.:1877-1956)による「スタンフォード・ビネー」である。スタンフォード・ビネーは，1916年版でドイツのシュテルン(Stern,W.:1871-1938)考案の知能指数を導入し，1937年，1960年，1986年と改訂を重ねて偏差知能指数(DIQ)や因子構造モデルを導入した。このように新しい概念が導入される一方で，ビネ・シモン式知能検査の基本概念である年齢尺度や精神年齢は廃止されている（中村・大川，2003）。

日本では，1908（明治41）年に1905年版ビネ・シモン式知能検査が三宅鑛一によって紹介され

---

<sup>1</sup> 本研究は，科学研究費補助金(22730535「知能検査デジタルアーカイブ」の構築)，15K04117「発達検査デジタルアーカイブ」の構築)の助成を受けたものです。

<sup>2</sup> Binetのフランス語読みとして，本論文では「ビネ」を用いる。ただし，日本で発売された検査や書籍名については，一般的に使用されている「ビネー」（「田中ビネー」など）を用いる。

たのを嚆矢として（三宅, 1908a,b,c), 1908年版の翻訳（三宅, 1910), <sup>きんだやひらく</sup>三田谷啓による知能検査用具の発売（三田谷, 1915, 1916), 久保良英による日本改訂版の発表（久保, 1918）が10年という短い期間に行われた。第二次世界大戦後まで含めると日本改訂版は数多く開発されたが、現在使用されているビネ・シモン式知能検査は、鈴木治太郎による改訂を原本とした鈴木ビネー<sup>3</sup>と、田中寛一<sup>4</sup>による改訂を原本とする田中ビネーである。なお、ビネ・シモン式知能検査の日本における改訂については、田中ビネーの歴史（中村・大川, 2003), 鈴木ビネーの歴史（石川・高橋, 2008), 久保による改訂（鈴木, 2003), 三田谷による改訂（鈴木・岡村・木下, 2009), 三宅による紹介（鈴木, 2016）が既にまとめられている。

田中ビネーは、1947（昭和 22）年に、「田中びね一式智能検査法」として出版された。この検査は、1937年版新スタンフォード改訂案を基に田中が作成したもので、問題は計120問、標準化調査協力者は4,886名であった。1954年版「田中びね一式知能検査法」は、田中自身が実施法と用具の改訂を行った。その後、田中教育研究所<sup>5</sup>が改訂作業を引き継ぎ、再質問の設定や規定年齢表記の改訂を中心として1,044名を対象に標準化された1970年版「TK式田研・田中ビネー知能検査法」、全問題の再検討とD I Q追加の目的で1,600名以上を対象に標準化された1987年版「全訂版田中ビネー知能検査法」、発達チェック追加や成人の知能の分析的測定を中心に2,513名を対象に標準化された2003年版「田中ビネー知能検査V」が発表されている（中村・大川, 2003）。

知能検査開発者オーラルヒストリーを収集する中で（鈴木・溝口, 2015; 鈴木・鈴木・安齋, 2016; 鈴木, 2017), 「全訂版田中ビネー知能検査法」・「田中ビネー知能検査V」の改訂を手掛けた田中教育研究所理事の大川一郎・中村淳子にインタビューを行う機会を得た。大川一郎は、鹿児島大学卒業、筑波大学大学院修了。筑波大学技官・助手、つくば国際大学講師・助教授をつとめ、立命館大学教授を経て、2006年より筑波大学大学院人間総合科学研究科心理学系教授に着任した人物で、専門は老年心理学、老年臨床心理学、心理アセスメントである。中村淳子は、国立音楽大学卒業後、幼稚園教諭、波多野勤子<sup>6</sup>の幼児教室講師を経て、田中教育研究所にテスター・研究員として勤務。筑波大学大学院教育研究科を修了し、2007年より桜花学園大学人文学部人間関係学科教授に着任した人物で、専門は知能発達、生涯発達心理学、臨床心理学、心理アセスメントである。インタビューは、前半は中村に、後半は中村と大川の二人に行った。人物名の敬称は論文の慣例に従って省いた。

---

<sup>3</sup> 鈴木治太郎が1930（昭和11）年に『实际的・個別的智能測定法』にて発表した、ビネ&シモン式知能検査日本改訂版。鈴木自身の手による改訂は1941年版と1948年版までだが、1956年の改訂を経て、2007年に小宮三彌・塩見邦雄・末岡一伯・置田幸子による鈴木ビネー研究会改訂版が発表されている。

<sup>4</sup> 田中寛一(1881-1962) 1907（明治40）年、東京高等師範学校英語科卒業。1913(大正2)年、京都帝国大学文科大学哲学科心理学専攻卒業、東京帝国大学大学院に進学、東京高等師範学校講師、後に教授。1929（昭和4）年、東京文科大学教授。1945（昭和20）年、日本大学教授。1947（昭和22）年、玉川大学学長。専門は、人間工学、教育心理学、教育測定、知能検査。（大泉, 2003）

<sup>5</sup> 1948（昭和23）年に田中寛一が設立。教育心理学の立場より教育の客観化を進めることを目的に、各種心理検査の開発、講習会の開催、研究等を行う機関である。（田中教育研究所, 2017）

<sup>6</sup> 波多野勤子（1905-1978）1927（昭和2）年、日本女子大学校英文学部卒業。1936（昭和11）年、東京文科大学心理学科選科卒業。東洋大学助教授、国立音楽大学教授、日本児童研究所所長を経て、1963（昭和38）年財団法人「母乃学園」（後に「波多野ファミリースクール」と改称）を創設し理事長に就任。専門は発達心理学、児童心理学。（大泉, 2003）

## 大川一郎・中村淳子へのインタビュー

インタビュー日程：2010年7月12日

場所：財団法人田中教育研究所

インタビュアー：鈴木朋子

### 田中教育研究所における仕事

鈴木：中村先生，研究所では，どんなお仕事をされてきたのでしょうか。

中村：最初は，テスターとして携わりました。知能検査との関わりはそこからが始まりです。テスターとして検査をするだけでなく，研究員としてテスト開発などで先生方のお手伝いをするようになりました。さらに勉強したいなあと考えて夜間の大学院に通いました。

鈴木：実践から入られたんですね。田中研究所のテスターは，どのようなお仕事をされているんですか？

中村：教育委員会などから検査をしてほしいというオーダーが研究所に来るので，小学校や中学校に出向いて検査を実施しに行きます。その検査結果を教育委員会や学校に報告書として提出するのです。幼稚園や保育所などからも依頼があります。また，研究所に直接，相談にみえる方もおられます。テスターを数年続けた後に，鈴木清<sup>7</sup>先生から「研究員としてやらないか？」と誘っていただきました。

鈴木：研究員はどのような仕事をされているのでしょうか。

中村：そうですね。研究員になると，テスト開発ですとか，研究の補助をしますので，大学の先生たちの下について，仕事をしていくというかたちになります。

鈴木：研修はどのようなようだったのですか。

中村：それは，研究所で行います。一年間くらいはかなりしますね。心理学の専門家が揃っていますので，理論は品川先生，統計は加賀先生と分担して講義してもらいました。テスターとしての実践は，最初は，定型発達の子どもの検査を行い，そのうち発達障害などの疑いがあるような難しい子どもを担当するようになっていきます。私が入ったころは，テスターも何十人もいたくらいの研究所全盛期でした。その頃は，定型発達の子どもの検査することが多く，ある意味では，検査に対してさほど問題意識を感じないで検査をしていたと思います。でも，だんだん経験を積むに従って「検査は，どんなに慎重にやらなければならないか」，「一人一人の子どもにとって，どんな意味をもっているのか」と考えていくようになりましたね。

鈴木：ちなみに，使われていた検査は，田中ビネーなののでしょうか？

中村：もちろんビネー法もやりますし，ウェックスラー系も K-ABC もやります。その子にとって最も適した検査を実施します。私が拠り所とする基本の検査は田中ビネーですけれど。検査をするときには，何か自分の中に基礎となるものがないといけないと思います。

### 中村の知能検査に関する仕事

鈴木：中村先生と知能検査との出会いは，研究所が縁だったということでしょうか。

中村：田中研究所に勤めたということが一番大きいかと思います。他のテスト開発（知能検査以外の

---

<sup>7</sup> 鈴木清(1906-1982) 1931(昭和6)年，東京高等師範学校文科卒業，1936(昭和11)年，東京文理科大学教育学科心理学専攻卒業，東京府立第一高等女学校高等科教授。東京高等師範学校助教授，玉川大学教授，横浜国立大学教授を経て，1955(昭和30)年東京教育大学体育学部教授，後に東京女子体育大学学長。他に田中教育研究所所長。専門は教育心理学，教育評価，体育心理。(大泉，2003)

研究)にも携わってきましたが、田中研究所といえばやはり知能検査がメインだと思います。知能検査はかなり批判された時期もありますので、それなりの葛藤もありました。それらも踏まえて、何が良くて何が悪いのかということも考えつつ、やっぱり必要なものじゃないかと思うようになりました。

鈴木：中村先生の知能検査に関係するお仕事はどのようなものでしょうか。

中村：テスターとして勤務したことと、87年全訂版の田中ビネーに関しては、実質的には大川先生と私が中心になって成し遂げたのではないのでしょうか。実験調査のためにテスターの派遣など実務的な仕事を引き受け、先生方や先輩のテスターたちと一緒に問題を作成いたしました。87年版田中ビネー知能検査の事例の本<sup>8</sup>は杉原一昭<sup>9</sup>先生と連名で私が書かせていただきました。事例は全部私が関わったものです。87年版でかなり蓄積したものを、ビネーVでは野原<sup>10</sup>さんと芹澤<sup>11</sup>さんという、とても優秀で実践に強い人たちが加わり、合計4人が中心で開発しました。Vには相当労力をかけ、理論マニュアルについては、ほとんどの部分を書かせていただきました。その他に、ノンバーバル検査<sup>12</sup>の開発が中野善達<sup>13</sup>先生と共著であります。ノンバーバル検査も、聴覚障害児のためではありますが、言語を使わない知能検査です。研究所関係では、就学児版の田中ビネーの「就学児版知能検査V」を執筆しましたが、これはもともとVが土台になっています。

鈴木：知能検査の魅力は何でしょうか。

中村：子どもの実際の発達状態をきちんとアセスメントした上でないと、ケアの方法がわからないと思うのです。よく検査は否定されますが、否定されるのでしたら、じゃあ、どのようにしてケアの手がかりをつかむのですかという、根拠もなく直感的で、逆に差別的な方法でなさっている可能性が高いと思うのです。知能検査はあくまでも道具ですから、目的ではないのです。道具として何が一番子どもの発達を見るのに適しているかを、経験も踏まえて検査を作るのはとても楽しいことです。ビネー法のいいところは、ビネーが帰納的に作ったという点にあります。ウェクスラーとか他の検査者は皆、先にできていたビネー法があったからこそ批判ができるのです。成人の能力は明らかに分化していきますから、これはビネーでは測れないっていうのは、言われても仕方がないことだし、そうであっていいと思います。目的が違うわけですからね。そう考えると、知能検査を作るときに、そのボトムアップしていく過程がとても面白いですね。ビネー自身も何の手がかりもなかった時に、子どもを見ていたら、あんなこともする、こんなこともするっていうのが面白かったのだと思いますね。私自身が、元々子どもと接していましたので、子どもの様子とかを見てみると、面白くてしょうがなくて。子どもの間違い(結果)も面白いし、間違える過程も面白いですね。何で間違えるんだろう？そういう子どもの反応がヒントになって、検査を作っていく上で、これは有効ではない、これは有効だって、試行錯誤しながら検査の内容を作り出すことはとても楽しい仕事です。

---

<sup>8</sup> 田中教育研究所(編), 中村淳子・杉原一昭(1994). 事例による知能検査利用法：子ども理解のための田中ビネー知能検査 田研出版

<sup>9</sup> 杉原一昭(1937-2008) 1966(昭和41)年, 東京教育大学大学院教育心理学専攻単位修得退学。横浜国立大学教育学部助教授などを経て, 1977(昭和52)年, 筑波大学心理学系助教授, 後に同教授。専門は発達心理学。(日本経済新聞出版社, 2009)

<sup>10</sup> 野原理恵 (財)田中教育研究所研究員。

<sup>11</sup> 芹澤奈菜美 (財)田中教育研究所研究員。

<sup>12</sup> 田中教育研究所編, 中野善達・中村淳子著(1996). ノンバーバル検査法, 田研出版

<sup>13</sup> 中野善達(1934-2009) 1959(昭和24)年, 東京教育大学修士課程修了。東京教育大学助手, 広島大学教授, 大阪教育大学教授, 筑波大学教授。専門は, 聴覚障害教育。

## 新しいテスト項目の作成

鈴木：テスト項目の中で、中村先生が開発された項目はあるでしょうか。

中村：ビネーVの中で、ですか？ ピアジェ課題であるような、水平垂直<sup>14</sup>なんかは、私の元々の研究の基礎となってるものでしたので採用させていただきました。

鈴木：新しい項目ですね、水を入れて容器を傾けると水平線はどうなるかという。

中村：そうですね。他に 87 年版で一番手直しが必要だと考えていたのに数概念の問題があります。基礎的なところはビネーを踏襲してますから、問題ないのですが、上の方の年齢級は学力テストみたいな感じがして、算数問題に関しては消化不良だったのです。それで、Vではもっと基本的な、知的能力を測りたい、しかもウェクスラー系の検査のようにじゃなくって、日常生活に即した課題にしたいと思いました。日常生活を参考に様々な問題を考えて作りしましたね。数の比較<sup>15</sup>とか、新しいものを創りましたが、あれも、かなり面白い問題になってるかなあとと思います。

鈴木：遡って 87 年版では、どの問題が、中村先生が作られた問題だったのでしょうか。

中村：新しく入れたのは、87 年では、順序の記憶<sup>16</sup>ですが、これは私がというわけではありません。ピアジェ課題をヒントにして先生や先輩たちと一緒に考えたものです。70 年版にはなく、87 年版に新しく入ったのは、先ほどの順序の記憶と絵の解釈の内容を一新したことでしょうか。あとは、用具をかなり 70 年版よりも変えたことでしょう。

鈴木：道具として、犬を使うのは面白いですね。

中村：この問題（順序の記憶）は、前は数字の記憶だったんです。70 年版までは低年齢級でも記憶課題として数字を材料にしていたのですが、子どもにとっては、具体物を用いて記憶するほうが理解しやすい。しかも、（数字を）反対からも言わせるのは難しい。順唱と逆唱とは、認知の仕方が違います。具体物になったことで、数字を知らなくても記憶できる範囲が測れる問題になったと思います。

鈴木：Vで新しくなった数の比較というのはどのような問題でしょうか。

中村：数の比較は、6 歳と 7 歳級に入っていると思います。この課題は、チューリップと蝶々という異なる材料を比較するものですが、たとえ物は違って抽象化できて数として扱えることを狙っています。それより下の年齢の問題も色々工夫はしてありますが、伝統的にすでにあった問題です。一方、成人級の問題は、かなり新しい問題を作りました。成人級は（13 歳級までの年齢尺度とは）考え方が違いましたので、流動、結晶という考え方が中心になっています。それで、かなり新しいものが入っています。

鈴木：成人級の問題、参考にされた他の検査はありましたか？

中村：レーベン<sup>17</sup>がありますね。Vでは成人級のマトリックス<sup>18</sup>となっている問題。流動性の能力課

<sup>14</sup> 田中ビネー知能検査V，第 65 問[8 歳]垂直と水平の推理の課題のこと。水を入れたコップを傾けると、水はどうなるかななどを問う。

<sup>15</sup> 田中ビネー知能検査V，第 58 問[7 歳]数の比較。虫や花が複数描いてある絵を見せて、数の違い等を問う問題。

<sup>16</sup> 田中ビネー知能検査法（1987 年全訂版），第 38 問[4 歳]順序の記憶。犬やボタンが乗る貨物列車を用いる問題。トンネルから出てくる車両の順番を当てる。

<sup>17</sup> レーヴン色彩マトリックス検査。言語を介さずに解答できる知能検査。標準図案の欠如部分に当てはまる図形を被検者が選択する方式。

<sup>18</sup> 田中ビネー知能検査V，A13[成人]マトリックス。横に並べられた幾何学図形の関係を理解し、空

題です。中野善達先生のところで、ノンバーバルの検査を作っているときに、レーベンの検査を見つけました。研究所で、他の検査開発を検討していた時に作り溜めた問題を、Vの成人級に入れました。レーベンを参考に私が考えたものです。ところが、レーベンをヒントにした課題がウェクスラーの改訂版に出たので、正直驚きました。スタンフォードビネーも、色はついてないのですが、レーベンを採用していました。流動性を測るとしたら、やっぱりこの問題が選ばれるのだろうなどは思いました。でも中身は全部オリジナルで考えていますので、問題内容自体は同じではありません。カードを使った成人級の記憶の問題も、新しく作りました。場面の記憶<sup>19</sup>などもオリジナルです。ネットワーク<sup>20</sup>は70年版から採用された問題で、杉原一昭先生と杉原隆<sup>21</sup>先生が中心に考えられた問題です。

鈴木：場面の記憶は、長い項目ですね。

中村：そうですね。受験者には嫌がられることもあります。しかし、再生と再認の双方をみることが出来て面白いのです。数唱を子どもたちの問題から外したのも、新しい試みです。自閉傾向の子どもたちの中には、年齢級に数唱問題が入っていると、それだけ通過してどんどん上の年齢級に進むことがあります。これは検査の効率が悪いだけでなく、何を調べているのかわからなくなりますので、各年齢級に配置するのをやめました。だけど「補助問題」にしているのは、記憶のスパンをおさえておくのは、ケアの面ですごく有効なので、直接点数値には反映されませんが、必ず実施するようになっています。記憶のスパンは年齢とともに広がってきますからね。成人になってしまう前に到達点に達してしまうんですけれども。参考にしておくと、記憶の範囲がどのくらいあるのかによって、教材を考えたり、この子の生活をどうケアしたらいいのかが分かりますから。成人に関しては、記憶の範囲を測っておくと、その方の現段階での記憶状況が把握できますので、成人には点数が結果に反映するようにしてあります。点数に反映しないのは子どもの方です。これは迷ったところですが、他に捨てがたい良い問題があったものですから。どうしても1年齢級に6問、あるいは1歳から3歳級までは12問しか入れられませんので。その考え方で行くと、数唱だけで1問取るのはもったいないと思って、外しました。

鈴木：田中ビネーVは、スタンフォードビネーの最も新しい改訂版とは、まったく違う方向になったんですね。内容的にも、日本で、オリジナルに考えたものが結構入っているのですね。

中村：スタンフォードの日本訳ではないということです。一つには、DIQにするかIQにするかっていうので私たちはさんざん悩みました。「もうこれからはDIQの時代なんだ」って言われて、議論したんですけど、やはり年齢尺度、精神年齢を残したいというのがありましたので、そうすると比例のIQを残しておくべきであろうと。その代わりにDIQも出るようにしようというのが、87年版からの試みです。この時に、二つに分かれるくらいの大議論をしました。

---

欄となっている場にあたる図形を選択する問題。

<sup>19</sup> 田中ビネー-知能検査V, A14[成人], 場面の記憶。テスターが読み上げる文章を聞き、場面が記述されたカードを時間順に並べるなどの問題。

<sup>20</sup> 田中ビネー-知能検査法(1987年全訂版), 第103問[成人I], ネットワーク。ルールに従って絵を選択する問題。田中ビネー-知能検査Vでは, A05[成人]の問題にあたる。

<sup>21</sup> 杉原隆(1942-) 1968(昭和43)年, 東京教育大学大学院修了。東京教育大学体育学部助手・講師, 筑波大学体育科学系助教授, 東京学芸大学教育学部助教授・教授を経て東京学芸大学名誉教授, 十文字学園女子大学特任教授, 財団法人田中教育研究所所長。専門は, スポーツ科学, 社会心理学。(杉原, 2008)

## 田中ビネーVにDIQと精神年齢・年齢尺度が併存する理由

鈴木：Vで、年齢尺度と精神年齢を残された理由をお伺いしてもよろしいでしょうか。

中村：はい。スタンフォードビネーの最新版でも廃止した年齢尺度や精神年齢ですが、これはもう、絶対に残すべきだって思ったのですね。というのは、発達の遅れのある子たちを、どうケアしようかとした時に、DIQでいくら言われても手がかりがないのです。「同じ年齢の集団内で遅れていますよ」と言われても、いったいぜんたいどうやって、どの辺を目指してケアすればいいのかわかりません。そう考えた時に、年齢尺度を残すことによって、「この課題は同じ年齢の他の子どもが6, 7割程度はできる問題なのに、それがこの子には難しいのだ」ということが実感できます。その子の発達状態に合った課題はどの年齢なのかがわかりますから年齢尺度を残したのです。年齢ごとの問題を作ったのは、ビネーを踏襲したわけですね。しかも精神年齢を残したのは、これは誤解されると困るのですが、その子どもの発達が、実際の年齢より遅れているとして、だいたい何歳くらい遅れているかを把握することができるメリットがあるからです。たとえば実年齢が9歳であったとしても、この子の精神年齢の、6歳くらいの子どもの理解できる範囲で働きかければスムーズに分かるのではないかしらと、思っただけで対応すると、ケアはしやすくなると思います。それで年齢尺度も精神年齢も残しました。ただし、これは、偏りのある子どもには、すんなりとは受け入れられません。偏りがある子どもや発達障害児の場合、あることは全然できないけれども、あることはすごく得意だったりしますので。精神年齢をいくら当てはめたところで、そこにぴったりと当たるとは限らない。でも、その場合、何ができないのか、何ができるのか、その問題が年齢尺度の何処に入っているのかが分かりますね。ある能力だけがすごく発達しているとしても、その子はどの年齢ぐらいの範囲で推移しているのかが、分かります。例えば、記憶に関する問題だけ実年齢よりずっと上まで正解していることがわかったり、言語的な刺激の課題では実年齢より下の課題でも正解できなかったりが見て取れます。そういったことを見るのには、やっぱり年齢尺度は捨てがたいですし、ケアの手がかりとして一番良いと思います。

鈴木：年齢尺度と精神年齢を残されたのは、子どものケアを考えてのことだったのですね。IQと言われてピンとこない人でも使えるような、利用者の立場に立った考えに基づいているのですね。

中村：そうですね。それともう一つ。遅れがある方たちを、20歳程度の人たちまでを、病院で見たことがあります。その人たちが、生活年齢が何歳でも、精神年齢で8歳、9歳くらいまでに達していると何とか社会で一人でも暮らせる可能性が高いようです。それよりもかなり低い、例えば精神年齢が3歳や2歳ともなると、他の人の手助けがないと一人で生活するのは難しいと思われます。IQで70からいくつまでは云々と言うより、精神発達遅滞の方をケアする側としては精神年齢が参考になると思っています。

鈴木：なるほど。とても臨場的な着想ですね。その子がどうやって社会で生きていけるかとか、どこまで手助けが必要かというのは、確かに精神年齢のほうが理解しやすいですね。

中村：そうなんです。

鈴木：なるほど。ところで、田中ビネー作成の際に、スタンフォードビネーは参照されたのでしょうか？

中村：87年版は、かなりスタンフォードビネーから影響を受けていると思います。もちろんVを作る時も、スタンフォードビネーを全部再検討したのですが、どうしても納得できないし、「日本の子どもには、これではなあ」と思いました。スタンフォードビネーは、スタンフォードIVから年齢尺度

を捨てましたから。それを考えると、年齢尺度を捨てたビネーⅣは、魅力がないと私たちは判断しました。ビネーが何にも手がかりがない時に、検査を作った意味をよく考える必要があると思うんですね。古いものがないと思ってるのではなくて、ビネーの精神を知能検査に残しておかないといけないと考えたのです。演繹的に作られた検査も必要ですが、なおかつ、帰納的に作られた日常生活にしっかり根付いた視点での検査は残しておくべきだろうと。しかも日本の子どもに合った環境を踏まえたものをもと考えたのです。

鈴木：田中ビネーⅤは、スタンフォードビネーの翻訳版ではなく、完全に日本オリジナルと考えていいのですね。

中村：ほぼオリジナルですね。ただし、ビネーが残した検査項目で、時代変化があっても変わらない検査をなるべく残そうとしました。ビネーの初版のもので、例えば、菱形の模写<sup>22</sup>であるとか。それから、今は紙に代わってしまっている長方形の組み合わせ<sup>23</sup>なんて問題もあります。あれは元々木版で作られていたものですが……。今の型はめ<sup>24</sup>問題は、これを参考に、ターマンがスタンフォードで最初に採用したと思うのですが、田中ビネーでもずっと踏襲してきました。そういう風に、いろんなところでビネーが考えたものを応用しながら変遷してきた問題はあると思います。時代を超えて発達をよく捉えた問題は、できる限り残しました。言葉は（時代によって）動きますので新しい馴染みのある言葉に代え、時代に即さない言葉は代えました。

### 大川一郎と知能検査の出会い

鈴木：大川先生が、初めて知能検査と出会ったのは、いつごろでしょうか？

大川：田中研究所ですね。87年版の田中ビネー検査の改訂の時に杉原一昭先生が関わっておられて、そのスタッフとして非常勤で入ったっていう感じですね。だから、最初から田中研究所には田中ビネーの改訂のために入ったのです。杉原先生に師事した結果、先生が所員をされていた研究所の仕事に関わるようになったという感じですね。個人的に言えば、研究とかいろんなことの出発点は、研究所が自分の中でのルーツみたいな感じにつながっているんです。いま高齢者研究を専門にしているのですが、それも結局は、田中ビネーに関わる中で「成人の加齢変化がどうか？」と考えた時に、その当時は世界的にも研究が手薄で、日本はもちろんそうだし、そういう中で高齢者研究を手掛けるようになったのです。

### 田中ビネー改訂における苦勞

鈴木：87年版ですけど、中村先生と大川先生が中心になって作られたということですけど、大川先生としては、どの辺を工夫されましたか？

大川：工夫というか、もう初めてのことで。専任として常時開発に関わってる人が中村先生だけなんですね。私は週に4日で。それでいろいろ教えていただきながら、かなりいろんなアナログな工夫をしました。当時パソコンとかはない。通過率の検討にしても、手作業でした。手書きでA3用紙に図

<sup>22</sup> 田中ビネー知能検査Ⅴ，第51問[6歳]，ひし形模写。手本のひし形を模写する問題。

<sup>23</sup> 田中ビネー知能検査Ⅴ，第41問[4歳]，長方形の組み合わせ。手本に合わせて直角三角形のカードを長方形に組み合わせる問題。

<sup>24</sup> 田中ビネー知能検査Ⅴ，第8問[1歳]，3種の型のはめこみ。はめこみ板の所定の箇所に積木をはめる問題。

表や通過率を書いて、それを今度はまた、短冊に移し替えて並べてという、そういう時代です、87年版の頃は。

中村：生のデータを恣意的に操作することはできませんから、どこに当てはまるか、ビネーの精神に合うように何パーセントのところで区切るかというところで迷うのです。大川先生が根拠を示して決断してくれたのは、クリアーで有り難かったですね。

大川：考えるほどは、きっちり綺麗に出ないんですよ。60%から70%の間とかの目安で尺度を決めたいのですが、そうもいかないのです。その前後で決めるしかない。

中村：87年版では修正年齢を再検討し、きちんと整理しました。その前までは、田中寛一先生が統計に詳しくだったので、当時のデータを分析して決められたのだと思います。その結果、修正年齢を13歳以上と定められたと思います。しかし、30、40年も経てば現状と合わなくなります。その頃には、誰も先輩がいないので、もう一生懸命考えて。「どうしたら現代に合わせた修正ができるのか？」と考え、加速化した精神年齢の伸びを統計的に処理して修正年齢を改めました。Vでもこのことは踏襲されています。

大川：そうですね。田中ビネーは1947年からあって54年、70年と改訂されて、87年版までの間の伝わりがほとんどなくて、修正年齢だとか加算月数も訳が分かりませんでした。作業するうちに理由づけっていか根拠がやっと分かった。その上で進めていくような感じでした。

### 田中ビネー改訂技術の継承

鈴木：田中教育研究所では、改訂のやり方をどのように伝えられているのでしょうか。

大川：実際、関わったスタッフからの伝わりでしかないですよ。70年の時は、今所長をしている杉原隆先生が、中心的に関わっておられて、70年と87年のつながりは出来ていたと思いますが。その前のつながりが無い。

鈴木：それは、「つながりが無い」というと、いつからないのでしょうか。

中村：70年版のときには杉原隆先生が関わっておられるのですが、70年版は、54年版をほとんど踏襲していますので、中身はほとんど変わってないと思うんです。ただし、データを取り直して統計的な改訂をきちんとされた版だと思います。54年版に関しては、それこそ初版の一部入れ替えただけであとは変わっていませんし、通過率も変えてないんです。これらのことは全部、87年の時に遡って勉強して分かったのです。だから、87年版でかなり変えられたのです。さらにビネーVが大改訂になりました。

鈴木：なるほど。知能検査の作成法を知っている人物がいない中での改訂が87年版だったのです。ところで、今回のVは開発にどのくらい期間がかかりましたか？

大川：3年のつもりが5年かかりましたね。87年版できちんと作ったつもりでいたんですけど、やっぱり、数年経ってみると、ユーザーが数千人単位でいますから、その声も聞こえてきます。それを反映しながら直し始めていくと、時間がかかります。「我々はそのままでは…」というスタンスでいても結局、やり始めるといい加減なものを出せないと思い始めるのですよ。それで真面目に、一生懸命に作ったと思います。

大川：まあ87年で苦勞し、今度03(V)版を出して、杉原隆先生と我々二人と、もう二人がいますから。次の改訂は、スタッフは充実していますよ。

中村：育ってますのでね。

大川：2003年（V）の形で、かなり中心的に2人の方が加わってくれたので、そこはずっとつながって。そういうつながりが無いと、たぶん無理ですね。

中村：やっぱり大川先生みたいな研究者の立場の人と、それから我々のように、ずっと叩き上げてきて実際に子どもと付き合ってきた人と、両方いないとダメだろうと思います。たいていの検査は、研究者だけで、あるいは逆に現場だけみたいなスタッフで開発しています。実践と研究がうまくかみ合って作れないと、ダメで。その点では田中ビネーは良いスタッフ構成の上に作られたものだと自負しています。

### ユーザーの声を取り入れた検査の改訂

大川：ずいぶん歴史があるし、ユーザーの方も多し、田中ビネーファンは多いんですね。何故かあっていうと、やっぱり WISC とかでは測れない、その部分がきっちり捉えられてるっていうのがあって。やっぱり日本の現状に合わせて丁寧に作ってあるから、そこが魅力なのでしょう。そういうビネー愛好家、ビネーを非常によく理解して使ってくださいの方がおられるから、これからもつながっていくのかと思います。

鈴木：ファンの方ですね。使ってる方からの声は実際どのように届くんですか。

中村：ユーザー登録してる人からのご意見と、講習会をしますので、その時に直接聞きます。こう工夫してほしいとか。それから教育委員会から依頼されて、説明しに行く時にしっかり言われますね。ここはやりにくいとか、ここをこうしてほしい、あと何年たったら時代にそぐわなくなるとか、そんなことまで言われますね。

大川：あとは改訂が必要っていう段階になって、ユーザーの方にアンケートを送って、気になるようなところ、変えた方がいいと思うことを書いてもらいフィードバックしてもらいます。そのユーザーの方がまた、実際データを取るときにはテスターとして調査協力もしていただきますので、その時のフィードバックもあります。やり取りの中でも情報は入ります。そういう意味では、そのユーザーの方のいろんな意見をくみ取ったかたちで改訂が行われます。

### 改訂における検査協力者たち

鈴木：マニュアルでは、標準化の時のテスターについて、研究所のテスターの方と講習会関係の方の名前が書かれているようですが。

大川：基本的に、2003（V）の場合は研究所のメンバーで、あと全国の資格認定者に実施していただくとか、意見をお伺いするとかいう感じですかね。

鈴木：多くのテスターのお名前がありますが、みなさん講習を受けたのでしょうか。

中村：はい、そうです。全員が講習を受けた方です。用具だけ送って、「この通りやってください」というものではありません。やり方をしっかり分かった方にしかテスターをお願いしていません。

大川：被験者探しも、以前は取りやすかったんですね。今は、まだ幼稚園は大丈夫なんですけど、小中学校などは、87年の時と2003年（V）の時と比べると、確保が難しくなってきました。

鈴木：どんな難しさがあるのでしょうか？

中村：テストを受けるために、授業時間を空けてもらって、しかも親の承諾がないといけないなど様々

な制約があるからです。昔でしたら先生が「やりたい」って言えば、それで、やってしまえばよかったんですけど。学校の意向だけで済んだのが、上手いかなくなったっていうのはありますね。個人が大事にされることは良いことなんですけど、調査をする側にとっては、非常にしにくい状況になっています。今後もそれは一番大きい課題です。

大川：そうですね。2003年（V）の時も、やっぱり中学校が取り難いので、うちの所員の先生の方でお願いして、校長からはOKが出て、さて調査しましょうかの段階で、結局親からクレームが来て一切ダメになりました。87年版の時はまず考えられないことでしたが、今はもう本当にそういう感じですね。親御さんの意向で、要するに一人の人が何かクレーム付けてきたら、「じゃあ面倒」、「じゃあやめましょう」、っていうことになります。

中村：他の方はいいって言っても、反対する人が一人でもいたら面倒なのでやめましょうってことになるのじゃないですか。

大川：それは今後も続くでしょうね。もっと厳しくなるかもしれないですね。幼稚園とかは、研究所の場合は出張テストに行ったり、講習会とかでつながりが強かったりで、まだ大丈夫なのですが。例えば集団式知能検査を作ろうと思っても、ちょっと苦労します。

中村：幼児であると、調査結果を伸べる手がかりにできるという親の期待があるから、あまり抵抗はないんですよ。でも、小学校、中学校になると、アセスメントされたことでその子の将来が決まってしまうんじゃないかみたいな、そういう抵抗感も大きいのではないかと思います。やっぱり、結果ではなくケアの方を重要視してもらいたいというのが、どうしても伝わりにくいんじゃないですか。

大川：あとまあ、ビネーの改訂の時が一番大変なのは、問題数が多いんで一個一個について全部検討しなきゃいけない。他の検査だと、何問、何十問で終わっちゃうんですけど、ビネーの場合は、10倍くらいの労力がおそらくかかると思います。各年齢級の各問題1個1個を違えて、用具も子どもがとっつきやすいように読みやすいように配慮していく。問題の精選をそういうやり方で行いますので。

## 検査用具の選定

鈴木：マニュアルでは、用具の作成過程について、新しい用具を試作して使い、答えを調べながら選んだと書いてありました。用具を制作する会社などと協力して作っていくのでしょうか。

中村：出版社関係の材料を作る会社がありますので。検査ができたあとも、管理します。標準化の時に使った（玩具の）車と違ってもらっては困るわけですよ。出版社には少しでも用具に変更があるときは連絡入れてほしいと頼んであります。（用具が）ユーザーのところに行ったときに違うのが入ってたりすると困りますからね。私どもが目光らせてるっていう感じでしょうかね。

鈴木：用具は専門のおもちゃ屋さんに注文しているんですね。

中村：そうです。それも、いくつか持ってきてもらって、「これじゃないとダメ」って言って。それで、テストします。

鈴木：絵も専門の方に描いてもらうのでしょうか。

中村：専門の方に描いていただきました。絵描きさんは3人替えました。

鈴木：ええ、そうなんですか。

大川：絵は大変なんです。絵は子どもがとっつきやすくないとダメなんで。最初の絵描きさんは、描いた絵がすごく暗くて。子どもがとっつきにくい絵でしたね。かなり描き進んでいた段階だけど、「こ

れではビネーは使えないでしょ」って。それで、03年（V）の時は、別の方に替わってもらいました。その方は上手いんですね。今の03（V）の絵は、非常にいい感じの絵、あったかい絵になりました。なぜ絵にするか、写真でないかって言われますが、意味があって。写真にすると硬いし、子どもがその問題の意図しているものに対して集中できないのです。それ、すごく大きいことだと思うんです。写真にしている検査もいっぱいあるんですけど、やっぱり絵で表現してもらおうほうが良いので、絵描きさんにもこの問題は何を求めているかっていうのを分かってもらって描いてもらいます。

鈴木：では、絵描きさんのところまで行って説明されるのですよね。

中村：もちろん絵描きさんとは何回も会います。87年版の時も、絵描きさんのところまで行きましたよね。今回はカラーになりましたから、余計に絵の印象が違います。白黒とは違った印象になりますので、より気を使いました。

鈴木：絵によって難易度も変わったりしますものね。

中村：はい。

大川：ビネーは、親しみやすさっていうか、子どものとつきやすさをすごく大事にしてるんで。絵はもう直結ですもんね。親しみやすさっていうのは。

中村：「ああ、面白かったな」って帰ってもらわないと、子どもの力が十分引き出されたことになりませんので。検査を受けた側が「ああもう二度とあんな検査は受けるもんか」って思うような検査であってはならないと思います。

鈴木：カラーにしたのは何か意味があったのでしょうか？

中村：そうですね。もう、カラーの時代でしょうし。ただ、カラーでない問題もあります。それは、色に反応してもらっては困るから。そういう問題がいくつかあって、意味があって白黒にしています。形の方に集中してもらいたいものは、色を付けていません。動物の見分け<sup>25</sup>だとか、異同弁別<sup>26</sup>とかいうのは色に反応してもらっては困るので、色をわざと落とします。これだけ手を抜いたのかとか言われるけど、そうじゃないんです。

### 時代の変化によって消える課題たち

鈴木：美醜の判定<sup>27</sup>について伺いたいのですが。美醜が入っていない理由を教えてください。

中村：もともとですね、田中寛一先生は最初から採用していません。鈴木ビネーにはありますけども。確かに知的発達の中に、美しいもの、あるいは正しいものを判別する能力があって、知的な発達とは関係がないとは言えないかもしれません。でもやはり差別的な感じもしますよね。新聞記事が出たくらい。伝統的に、寛一先生も使用されなかったのは、差別的なことを思われたのと、本当に子どもの知的発達とマッチングしてるのかも、定かではなかったからではないでしょうか。そう言えば、田中

<sup>25</sup> 田中ビネー知能検査V，第13問[2歳]，動物の見分け。動物が描かれたピースを渡し、カードの中にある同じ動物を探す問題。

<sup>26</sup> 田中ビネー知能検査V，第32問[3歳]，絵の異同弁別。2つの絵が描かれたカードを見せて、絵が同じものか違うものかを問う問題。

<sup>27</sup> ビネー式知能検査1908年改訂版（Binet & Simon, 1908）における6歳児級の問題として登場した、女性の顔を描いた2つの絵のうち、どちらの絵が美しいかを判断する問題。日本におけるいくつかの改訂版でも、日本風の女性の絵が課題として用いられたが、田中ビネーでは使用していない。

ビネーでは、色の判別<sup>28</sup>も入れてませんね。年齢とともにきれいに上昇する問題かどうか難しいところですから。

大川：あと、時代変化と差別との関連でいえば。絵の不合理問題で、下駄と靴と履いている場面<sup>29</sup>はいいんですけど、反応例として「カタチンバ」<sup>30</sup>とか、「カタテオチ」という言葉は現在では、禁止用語ですよ。絵は残してますけど、反応、採点基準のところ直しています。でも、絵が一番難しいんですよ。時代によってどんどん変わっていくので。

中村：のこぎりはもう使わない。70年の時は鉢巻きして、のこぎりが逆さで、足元も、脚絆<sup>きゃはん</sup>だったんですよ<sup>31</sup>。「のこぎりと鉢巻きがおかしい」に加えて「靴がおかしい」ってことだったのを、こっちに直したんですよ、87年では。

鈴木：脚絆も今は分かんないでしょうね。

中村：今やのこぎりさえも分かんないって言うんでやめて、(笑)こちらになりました。

大川：この前は、包丁でしたよね。包丁を逆さにして切ってた。で、絵にしたらおかしいので、結局最終的にこれになった。

中村：捨てた問題がたくさんあります。Vの時の実験段階では、のこぎりの代わりに包丁にして実験しても、絵ではどちらが切れる方か切れない方か見分けがつかなかった。そこで、スプーンが逆さまの絵にしました。

鈴木：なるほど。ちなみにそのようなアイデアはどうやって出されるんですか？

中村：私たちです。そこが面白いんですよ。

大川：もう、試行錯誤ですよ、ある意味。絵描きさんに「これ描いて」と、調査して、また調査しての繰り返しで… (笑)

中村：それを考えるのが面白いんですよ。絵の解釈なんかも、初版の田中ビネーですと、「列車が来て崖崩れで危ない…」という絵だったんですけど。「あれは時代にはそぐわないね」っていうところから始めて、87年版でも考えに考えて、散々いろんな問題を作っては捨ててきたんですよ。

大川：かなり予備的な調査をしています。標準化する前段階でデータを取ってます。そこで感触をつかんでだめだったら、せっかくのアイデアも没にします。その繰り返しですよ。

鈴木：日本人の子どもに合わせて、日本の文化に合わせたというところはありますか。

中村：話の不合理だと豊臣秀吉<sup>32</sup>なんかがそうですね (笑)。

大川：そう (笑)。だけど、田中ビネーは、基本的に日本バージョン、日本仕様ですよ。

中村：黒人の絵などは、今は日本の子どもには馴染みのないことで。これからは多文化になって、変

---

<sup>28</sup> 4色の色を印刷したカードを見せて色の名称を問う問題。ビネー・シモン式知能検査1908年版では8歳級の問題として、1911年版では7歳級の問題として採用されている。

<sup>29</sup> 田中ビネー知能検査V、第44問、第49問。絵の不合理。絵の中の不合理な部分を指摘する問題で、スーツを着た男性がサンダルと靴を履く絵、女の子がカレーライスを食べるスプーンを反対に持っている絵がある。

<sup>30</sup> 田研・田中ビネー知能検査法(1970)、第49問[6歳]、絵の不合理(A)の中野解答例では、履物が左右で違うことを指摘し「片ちんば」であることが分かれば正当とされていた。

<sup>31</sup> 田研・田中ビネー知能検査法(1970)、第49問[6歳]、絵の不合理(A)。大工が鉢巻きと脚絆を身につけてのこぎりで丸太を切る絵、雨の中、屋外でたばこを吸う男性と編み物をする女性の絵などが使われている。

<sup>32</sup> 田中ビネー知能検査V、第95問[13歳]、話の不合理(D)。短い話を聞き、不合理な点を指摘する問題。問題①に、豊臣秀吉の名前が登場する問いがある。

化はあるとは思いますが。やはり、日本の子どもたちに抵抗が無く、日常生活で自分の生活圏と同じものを考えたということです。でも、時代が変わってくると、また変わってくる可能性がありますよね。絵の不合理だって、もうバーベキュー<sup>33</sup>もしないような時代になってきたら、バーベキューの問題はなくなるでしょうし。

### 田中ビネーにおける課題の作り方

中村：検査の作成では、元々ビネーの考え方から、興味を引くような問題構成にしています。それから、前の問題の影響が残るような問題を続けないようにも配慮します。

鈴木：それは、問題の順番を決めるときには何か基準があったわけではないんですね。

大川：みんなで置き替えながら、「あっこれではダメだ」という形で。

中村：通過率も重要ですから、何次元もの関わりで、決めているわけですね。同じ年齢級の中でも、できる限り易しいものから並べていく。バラエティーに富むように、子どもが飽きないように、並べていきます。

鈴木：ビネーVでは、新しく発達チェックが入ったと思うのですが、これは何か要望を反映させたのでしょうか。

中村：そうですね。1歳級の問題でもできない子どもってというのが当然あったわけで。1歳級の問題ができないと手がかりが無くって、ただ検査不能で終わったところを、その下まで考えてみようとしたのです。ただ、1歳の子や0歳の子どもも調査はしたんですけど、その時々での子どもの様子によってまったく反応が違うわけですよ。当然、親御さんが一緒とか、保育者が付いてでの検査しかできません。だからこれは、通過率としてきれいに上がっていくようなデータは得られないと判断して、チェックというかたちに留めました。

### 社会の知能検査への影響について

鈴木：知能検査が社会にどのように影響されてきたのか、お考えを教えてください。

大川：就学時、遅れの子にとってはなくちゃならないテストだと思います。遅れの子だけじゃなく、知能の発達をしっかりと見るためには、1対1で子どもの様子を見ながらやれますので、子どもの客観的な状況を把握できるという意味で、なくてはならないモノだと思います。実際の把握のためですよ。また、どこが遅れて、どこが進んでいるというのも分かりますので、その対応に対しての示唆も得られるという意味では必要です。ただ、その利点と欠点がありますけど。周りの知能検査に対する見方に偏見があって、そのギャップが歯がゆい部分があります。分かってる人はよく分かってるんだけど、分かんないでおそらく使っていない人が、人の差別化みたいな感じで思ってる人が多いのでは。それには違和感というか、「ちゃんと使えばいいのに」と思っています。「批判するんだったら十分理解した上で批判してほしい」って思いますよね。

鈴木：批判の声直接先生方のもとまで届くのでしょうか。

大川：まあ、本とかネットとかでみる人が多いです。あと、知能検査不用論とか、結構ありますもんね。

---

<sup>33</sup> 田中ビネー知能検査V，第49問[6歳]，絵の不合理。問いの中に，雨天にバーベキューを楽しむ絵がある。

中村：いい加減な検査の仕方をしていて、「知能検査があてにならない」と言っている人が多いんですね。きちんとした手続きを踏んで、きちんとしたアセスメントをした上で、そのためにこれを使って、じゃあどうケアしようかっていうことをしていないから、「差別だ」と思うんですね。

大川：そうですね。確かにやる側も対応とか、それを使って子どもたちにどう結果を返して、子どもたちをどうケアしていくのか。それをしないで、IQいくらでしたら終わっちゃう。そこの部分の批判は当然あってしかるべきかなって。ただ、作っている側としては、数値を出すためではなくて、ケアや対応を思考しながら、使ってほしいという思いはあります。

中村：そうですね。第一ビネーが作ったときの、元々の趣旨を考えると、アセスメントするだけではいけないってことは分かるだろうと。ビネーの精神、遅れがあったらどうやってこの子たちをケアしたらいいかっていうことが始まりで作った検査なのに、アセスメントしただけで終わり。「この人このぐらいです。ですから今後の学習は無理です」というような形で、切ってしまうからこそ、「検査なんかしない方がいい」「子どもの芽を摘む」みたいなことになるのでしょう。けど、そうじゃなくて、あくまでも道具ですから。それを使う側の問題だっというのを、もっと自覚してもらえたらよいのにと思ってます。

### 知能観について

鈴木：先生方の「知能観」を教えてください。

大川：こういう検査で測られている知能ってごく一部で、まずそれが前提だろうと思います。知能という大きなものの一部しか測られていない。ビネーの場合、できるだけ学力と関わらずに日常生活の知的な部分を引っ張り出すような問題を大事にしている。我々もビネーと同じように、日常生活に密着した問題を使って、知能を引っ張り出したっていうこともある。個人的な考えでは、知能は人の知的活動に関わるものすべてに関わってくるだろうし、情動的な、人の気持ちを分かるというのも、やっぱり知能の一つの働きだろうと、広く考えてます。

中村：私もそう思います。私は、ビネーが最初に考えた問題を大事にしたいと思っているんです。人間にはいろんな能力があるけれど、最終的には、トータルなものを大事にしたい。今、ガードナーみたいに多重知能と言って、何もかもすべて知能と分析的な見方を強調する研究者も多いのです。それも納得できるんですけども。実際に、いわゆる発達障害的な子ではWISCだとかK-ABCのように、調べている因子や課題が分かるような検査を重要視しますよね。それは分かりやすいんですけど、でも、実際の子どもを見ると、「この能力が落ちてる。この能力は秀でてる」と診断しても「でも他のところでカバーしてる」というのが、実感としてあるんですね。だから、検査の結果と、その子自体の行動や発達では、必ずしも表に出てくるものが一緒じゃない。そうすると「いろんなところで、トータルにみてこの子は一生懸命がんばっているんだなあ」と思うのです。だから、ビネーは一般知能なんて言ってないですけど、ビネーの知能観を当てはめるならばg因子的なもの、最終的には、人間の能力ってトータルなものではないかと私は思ってます。いわゆる、一般知能というのではなく、いろんな凸凹してることを一生懸命こう補いながら生きているような。それが私たちなんじゃないかしらと。だからこそ検査だけではすべては測れないと思います。でも、ビネー法は一つの手助けにはなっていると思います。ビネーを上手に使うと「その子、もしかしたら、こうなるかもしれない」という手掛かりには一番なる検査かなと、思います。演繹的に作られた検査ではないので、

わかりにくいかもしれません。臨床経験が少ない方は、「ビネー法では、ただ IQ と精神年齢だけしか出ない」っておっしゃる。でも、その子の反応自体をしっかりと観察していると、何を手がかりとして、どこからこの子をケアすべきかが分かるはずだと思います。

大川：ビネー法のポイントはそこですね。分析的に見るのか、統合的なものとして見るのか。ビネーは、知能を統合的なものと考えている。要するに、問題を通して知能を統合的に捉えよう、引っ張り出そうとしている。そこが分析的な人から見ると、「何で分析的にできないんだ」ってなる。その違いはあるでしょうね。私たちは別に分析的なものを否定しているわけじゃないのです。ある意味では分析的な視点ももちろん大切で、その子のためになる検査の使い方をすればよいと思うんです。

## おわりに

本研究では、1987年の全訂版田中ビネー知能検査法、2003年の田中ビネー知能検査 V の改訂を行った田中教育研究所の大川一郎、中村淳子へのインタビューを報告した。インタビューでは、改訂作業における問題作成の工夫、改訂作業の継承、知能観等が語られた。

日本で田中ビネーが普及した理由について、江口（2010）は、第二次世界大戦後の新教育の流れによる教育測定研究への関心が支えとなり、多くの教育関係者が利用したことをあげている。このような社会的背景に加えて、田中ビネーの検査自体が日本の子どもと文化に寄り添うように発展したことも普及を手助けしたと考えられないだろうか。田中ビネーは1937年版新スタンフォードビネー改訂案を基として出発したが、改訂を重ねるなかで日本独自の問題の設定（水平垂直、順序の記憶等）と結果の表現法（DIQ と精神年齢・年齢尺度の併存）を持つ日本オリジナルの知能検査となった。改訂の背景には、講習会等によるユーザーとの丁寧な対話と、「年齢尺度は捨てがたいですし、ケアの手がかりとして一番良い」と中村が述べるような日本の臨床経験からの着想が存在する。心理学的言説のカテゴリーは時代とともに変化するという Danziger（1997）の言葉を借りれば、田中ビネーは、日本の時代・文化・ユーザーとともに変化し育った検査ということが出来るだろう。

知能検査の改訂作業を技術の継承という観点からみると、田中ビネーは、継続的な改訂作業を機関の中で行っている点が特徴といえる。田中ビネーの改訂作業について、大川は「実際、関わったスタッフからの伝わりでしかないですよ」「87年で苦勞し、今度 03（V）版を出して、杉原隆先生と我々二人と、もう二人がいますから。次の改訂は、スタッフは充実していますよ」と述べている。この言葉からは、一つの機関の中で、実際に改訂作業に携わった人が改訂作業を行いつつ次世代の人材を育てている様子が見えてくる。また、改訂作業を行う人の専門性については、中村が「やっぱり大川先生みたいな研究者の立場の人と、それから我々のように、ずっと叩き上げてきて実際に子どもと付き合ってきた人と、両方ないとダメだろうと思います。（略）実践と研究がうまくかみ合って作られないと、ダメで。その点では田中ビネーは良いスタッフ構成だと自負しています」と表現している。つまり、田中ビネーの改訂作業は異なる専門性を持つ人々の協働であることが示唆される。鈴木・鈴木・安齋（2016）は、知能検査の継承と発展は、個人間の共同作業から専門家集団による組織的作業に変化することで成り立つと述べた。この報告における変化が出版社の主導によるものだったのに対して、本研究における田中ビネーの継承は、田中教育研究所という機関を母体に行われているのが特徴である。機関を母体にした継承システムは、個人間のつながりも含めた細やかな次世代の育成を可能にするという意味で、より継続的で安定した知能検査の継承を可能にするのではないだろうか。

さいごに、本研究のインタビューは、現代における知能検査改訂作業の困難を未来に伝える資料としても意味がある。鈴木（1917）では、鈴木ビネー改訂版を出版した古市龍雄が、現代の標準化協力者確保の困難さについて言及したが、本研究のインタビューでも同様の問題が語られた。「(昔は)学校の意向だけで済んだのが、上手いかなくなっただけというのはありますね。個人が大事にされることは良いことなんですけど、調査をする側にとっては、非常にしにくい状況になっています。今後ともそれは一番大きい課題です」という中村の言葉は、田中ビネーVの改訂作業で標準化協力者確保に困難があったことを示している。実際の標準化協力者数をみると、田中ビネーVは合計2,513名が協力を行っている。歴代の田中ビネーの標準化協力者数は、1947年版は計4,886名、1970年新訂版の標準化協力者は、検討実験297名、改訂実験747名の合計1,444名。1987年全訂版では、第1次予備実験約600名、第2次予備実験約500名および本実験1,014名まで含めると合計数は約2,100名である。田中ビネーVの調査協力者数は、1947年版に比較すれば劣るとはいえ、決して少ない人数ではない。しかしながら中村が上述のような言葉を述べているのは、昔に比べて標準化に協力する者が少なくなり、改訂作業の大きな障害となっている実感を示しているのだろう。日本では、2003年に「個人情報の保護に関する法律」が成立し、2005年に施行された頃から、様々な場面で個人を尊重し情報開示しない姿勢が優勢になった印象がある。2000年以降に標準化された田中ビネーV及び鈴木ビネー改訂版は、このような社会的風潮の影響を受けて改訂作業に困難が生じた可能性がある。

田中ビネーは、スタンフォード改訂版を基としたものだったが、改訂が重なることで、日本独自の文化と時代を反映した知能検査に発展した。改訂作業は機関を母体に行われ、検査の改訂を行いながら次世代の人材を育てることによって日本の子どもと文化に合わせた継続的な発展を目指している。外国版の翻訳ではなく、日本で愛される日本独自の知能検査とは何かをインタビューは示唆している。

## 謝辞

大川一郎先生と中村淳子先生には、長時間のインタビューにご協力をいただいた。先生方の知能検査に対する情熱と姿勢には感銘を受けました。心より感謝を表します

## 【文献】

- Binet, A. & Simon, T. (1905). Méthodes nouvelles pour le diagnostic du niveau intellectuel des anormaux. *L'annee psychologique*, 11, 191-244.(中野 善達・大沢 正子(訳)(1982). 知能の発達と評価 福村出版)
- Danziger, K. (1997). *Naming the mind : How Psychology Found Its Language*. UK: SAGE. (河野 哲也(監訳)(2005). 心を名づけること—心理学の社会的構成— 勁草書房)
- 江口 潔(2010). 教育測定の世界史—田中寛一を中心に 田研出版
- 石川 衣紀・高橋 智(2008). 大阪市視学・鈴木治太郎と知能測定法標準化の実践: 1920年代を中心に 東京学芸大紀要総合教育科系, 59, 363-378.
- 久保 良英(1918). 小児児童の智能査定の研究 児童研究所紀要, 1, 1-64
- 中村 淳子・大川 一郎(2003). 田中ビネー知能検査開発の歴史 立命館人間科学研究 6, 93-111.
- 日本経済新聞出版社 (2009). 著作一覧 杉原一昭, 日本経済新聞出版社 <<http://www.nikkeibook.com/writer/807/>> (2017年9月22日)

- 三宅 鑛一(1910). 通俗病的兒童心理講話 敬文館書房
- 三宅 鑛一・池田 隆徳(1908a). 智力測定法(其一) 医学中央雑誌, 6(1), 1-17.
- 三宅 鑛一・池田 隆徳(1908b). 智力測定法(其二) 医学中央雑誌, 6(2), 26-38.
- 三宅 鑛一・池田 隆徳(1908c). 智力測定法(其三) 医学中央雑誌, 6(3), 12-28.
- 大泉 溥(編)(2003). 日本心理学者事典 クレス出版
- 三田谷 啓(1915). 學齡兒童智力検査法 兒童書院
- 三田谷 啓(1916). 學齡兒童智力検査函 南江堂
- 佐藤達哉・溝口元(編)(1997). 通史日本の心理学 北大路書房
- 杉原隆(2008). 次世代研究基盤リサーチマップ杉原隆 国立情報学研究所社会共有知研究センター  
<<http://researchmap.jp/read0008777>>(1917年9月11日)
- 鈴木ビネー研究会(編)(2007). 改訂版鈴木ビネー知能検査法 古市出版
- 鈴木 治太郎(1930). 實際的個別的智能測定法 東洋図書
- 鈴木 朋子(2003). 久保良英によるビネー式知能検査の改訂 心理学史・心理学論, 5, 1-13.
- 鈴木 朋子(2016). 医師による知能検査の開発—東京帝国大学時代と東京大学時代において— 心理学史・心理学論, 16/17, 25-36.
- 鈴木 朋子(2017). 鈴木ビネー知能検査改訂への道：心理検査出版社社員へのインタビューから 横浜国立大学教育人間科学部紀要, I 教育科学, 19, 85-101.
- 鈴木 朋子・溝口 元(2015). 心理学から見た長谷川式簡易知能評価スケールの特徴：長谷川和夫へのインタビューから, 横浜国立大学教育人間科学部紀要, II 人文科学, 17, 11-27.
- 鈴木 朋子・鈴木 聡志・安齋 順子(2016). ウェクスラー式知能検査本邦導入の背景：品川不二郎・孝子へのインタビューから 横浜国立大学教育人間科学部紀要, II 人文科学, 18, 1-18.
- 鈴木 朋子・岡村 宏美・木下 利彦(2009). 三田谷啓によるビネー式知能検査の改訂 心理学史・心理学論, 10/11, 1-10.
- 田中 寛一(1947). 田中びねー式智能検査法 世界社
- 田中 寛一(1954). 田中びねー式知能検査法 日本文化科学社
- 田中教育研究所(編)(1970). TK 式田研・田中ビネー知能検査法 田研出版
- 田中教育研究所(編)(1987). 全訂版田中ビネー知能検査法 田研出版
- 田中教育研究所(編)(2003). 田中ビネー知能検査V 田研出版
- 田中教育研究所(2017). 田中教育研究所について 一般財団法人田中教育研究所<<http://www.maroon.dti.ne.jp/tier/about.html>>(2017年7月31日)